

秋水
泡語

卷
の
五

二
〇
〇
一
年

柳沼重剛という人の『図書』の小文から

「人が思想を持ち得るのも書き言葉によって文を書くことによってであり、またそれ以外の手段では思想をもつことはできない。」

「内容の豊かなコミュニケーションをすることができるようになるのは、書き言葉を通じての学習によつてである。おしやべりを構成している話し言葉のかなり多くは、反射運動でしかない。」

「書き言葉とは、自分が使う言葉を、知性によつて整理統御した文章のことである。：一、借り物の言葉で間に合わせないで、自分の言葉を持つこと。二、言葉を削り込むこと。三、言葉にリズムをもたせること。：」

「自分の言葉を組み立て、削り込み、磨きをかけることによつて、人ははじめて自分の文体をもつことができる。そして、自分の文体をもつことがそのまま自分の思想をもつことに通じる。あるいは、その思想を自分固有の文体によつて訴えるから説得力をもつのだという言い方をしてもよい。」

「言葉というものは、意味を伝えるだけに終わるものではない。」

一月十四日

この家にも雪は降り積む、降り積もる

その音はただ研ぎ澄ます心だけ聴くこと叶う雪積もる音

身をすくめ湧く力待つ吹雪の夜

一月十五日

旅人が雪の峠を越えた冬

一月十六日

寺の屋根ひとときわ高く雪の朝

一月二十九日

自然に感動しなければ、句は口にまで上らない
生きていることを深く心に感じなければ、歌は生まれない
わたしはたのしまない

二月十三日

風邪癒えずじりじり鳶の輪に見入る

二月十五日

春雪に犬とおびえる夜寒かな

二月二十四日

ぬかるみに楢円のボール追う者は春まだ浅い土を味わう

「鬼の歌仙2」

勉強し梅の香尋ね踏む氷

先達もなく黄塵を行く

倫敦の御者は海馬をよく肥やし

探しあてたる城外の春

ちぢこまる土筆に陽射しやわらかく

蕪村の筆が描く童よ

馬死んで老女幾たびさまようか

夢の内なるふるさとの春

三月三日

かすむ野に出て手作りの雛遊ぶ

ルノアールの光消し得ず春の雪

三月七

草原の風を黄砂に聴く日かな

三月九日

岐路に立ち自由を選び去る人を送る宴終え月の夜道を

月光に梅白く見る酒後によく

さまざまの思いがよぎる酒後の床早春の空澄みわたる下

三月十日

春めいてバグ一匹を探し出す

三月十四日

風吹いて布団一枚減らす夜

三月十五日

待ちかねた春や蝙蝠踊りだす

三月十七日

海棠を植え替えて待つ老いの春

三月二十日

水の上散る梅は行く忘却と

片々と心砕けた末法は論しの歌をただ消費する

三月二十三

骨拾う外で童子の春の歌

人ひとり壺中に春と入りにけり

四月一日

愚痴悔やむいさぎよい花咲く頃に

花盛り望月までの得がたい日

四月六日

人生の夢幻を前に愚者として見極め得ずに散る花の中

四月七日

花曇り茶室に釜はしんしんと

菜の花を照らす夕陽が茶杓まで

蜘蛛の糸頼りくるくる櫛の葉は若葉にゆずり春の涅槃へ

四月八日

「家人と油山に遊ぶ」

一山散万桜
春雨将欲降
不知明年来
亦得此会同

念仏も忘れた者の灌仏会

(テレビの映像)

ちりつのるはなにやよひのもちつきは
ひとをのこしてくものへにさる

(太陰暦三月十五日)

四月十五日

消耗し葉を開く木の声を待つ

葉桜はまた花咲かす時を期す

四月二十一日

渴仰しそぼ降る雨に立つ牡丹

予知持たず雨に若葉を出す公孫樹

四月二十二日

映画「見出された時」を見に行く。

咲き競う花々の上柿若葉

見出した時を再び生きる春

行く時を静止して観る身心を希求して在る春の夕暮れ

四月二十九日

緑風が雨を走らす禅の時

五月十日

夜鳴き鳥移り行く春取り逃がす

五月十一日

花盛り髭の床屋の店の前

五月十三日

ため息は老いた式部か空木咲く

(チエニーも老いた)

春の蚊が掌に啓示するいのちかな

臨界の核分裂で殺された人の番組息のんで見る

五月十九日

乾く田と声を出さずに麦雨待つ

六月六日

夏風邪や倦むことを得ぬくらしあり

六月七日

米国在住の華人に写真を送るのに添えて、詩もどきを作る。

「與張兄訪唐津」

昔漢使来白砂江

今遊子樂萬里交

鏡山眼下虹松林

初夏風渡海陸廣

六月十一日

崩壊しなおまだ生きて母がいるわたしの悪をあばきだしつつ

六月十五日

大いなる嘆きを嗤う哲人が世を変えるには行為すべしと

六月二十四日

遠く見て西瓜の種を嚙んでみる

蚊遣火や永き薰習待つ身かな

掌中の胡桃の音を高くしてわたしを変える思案にふける

七月三日

かしましい世に低声で語る蟬

七月七日

乱調で胡蝶が踊る峠道

七月九日

マジヤールの舞曲に心浸しつつ夕暮れの海遠く見る夏

向こうからイージーライダーかぶとして浮世の底を高々と行く

七月十一日

我こそは徒歩空拳で水の星羽衣も無く深深と行く

地に落ちて無窮花の無垢も潰え去る

人あつて花のいのちは強きもの生死巖頭一筋の道

七月十五日

姿見の中の現し身人の生

「山」 済んで午睡して聞く終い梅雨

雷神もオイサオイサと雲を追う

空の水みな打ち尽くし蟬一つ

七月十八日

蝶抱え蜻蛉は酷暑に身過ぎする

七月十九日

白鷺が首出し歩む田の青さ

七月二十四日

大きな縦は、その芯に人を蔵し

芽吹く春には、春なりに

紅葉せずとも、秋なりに

おおらかに育む
育み育み

自由な人のように

しなやかに立つ

やがて

枝々からはばたくものが

わたしは心むねに、大きな樅を蔵し

酷暑の夏には、夏なりに

凍る冬にも、冬なりに

倦まずに育む

育み育み

一本の木のよう

しつかりと立つ

やがて

そこからはばたくものが

八月一日

大杉の頂越しに夏陽射し千年の時積もる谷底

(異国の森)

幾許の年輪となるか我が時空

夏寒や獄あつた島渡る風

八月八日

生き急ぐ蝉の呼び声夜明け前

八月十三日

海風を入れて海見る夏座敷

「人生寄するがごとし、なんぞ楽しまざる」蘇東坡

八月二十一日

翅折れて蝶は世界に感じ入る

白石も娘気遣う夏の果て

八月二十七日

寄り添って空蝉が住む木蔭下

空蟬の身に残響を聞く朝

木も人も水に飢えて夏過ぎる

運命と波のまにまに生きる意思

五島から銚子のはるか沖まで漂流した人が救助された。

九月一日

全天に虫の声満つ願い満つ

仰臥する身を月光で洗う秋

九月三日

月にまで雲も流れる風の盆

(太陰暦七月十六日月齢十五)

九月四日

トキスデニカケガヘノナイアキノクレミハトラハレテオダハラカイギ

九月十日

紀の国の野分の音に木霊聞く

九月十七日

揺り椅子で揺れて見る萩暮れる海

(願望)

一寸の虫一町を被う声

九月二十二日

母の守り此岸も今はよい日和

九月二十七日

自転車のかごに花束街に秋

長広舌如来も今は口つぐむ世に勇ましい議論が満ちて

唐茄子屋政談を聞き微笑得て腹腔洗い秋茄子を食う

(志ん生)

十月一日

雲一時去つて名月天の情

十月二日

昨夜は雲もにぎやかで
胸にもあつた重いもの

今夜は月も円満で

星たち軽く遠慮がち
しばらく見上げて
またしばらく・・・

踵をめぐらし

わたしの影は

月の光と書斎に入る

電灯消した部屋の中

月の光は、本や何やにおさまった

十月五日

野の道の花に雀のむくろ置く

黒衣の人金木犀に触れる袖

十月九日

秋雨を眺める窓にある眼

十月十一日

十月の昼寝、友らを想いだす

老健で引き取る母は三日ぶり切断された時空に迷う

十月十三日

和歌浦バス待つ空のうろこ雲

紀三井寺せつない声の願い事

(今もそういう人がいる)

蠨螂も仰向き拝む大師堂

片男波四つの帆影白き秋

十月十四日

「中秋根来寺八句」から

根来寺を走る女の勇ましさ

関消えて庭につわぶき水の音

秋の陽の波紋を軒に雨宝堂

大らかに大塔宝輪天高く

秀吉の打った弾痕秋日和

(野望むなしく置き去る歴史)

反歌

弾痕も今はなめらか大塔は秋の日中にのびやかに立つ

十月十五日

鬼蜘蛛が落ち葉捕らえる沖の海

マルクスの像に椎の実落ちる音

「人生識字憂患始、姓名粗記可以休」

十月二十三日

霜未だ天上に有り髪に霜

霜降の日に

十月二十四日

「狡兎死し走狗煮られる」この成句身をもって知る天下の秋に

南山の樹下で秋水海めざす

十月二十五日 蘇東坡の詩句「門前万事不掛眼、頭雖長低氣不屈」に和して

蜜のごと白湯飲み送る老いの秋

軾の詩に頭を低れる夜寒かな

十月二十七日

豊穰に至り式部の濃紫

老犬が跛を引き衛る式部の実

十月二十八日

NHKの番組でブラックホールのことをやっていた。

奈落もつ三千世界めくるめく旅路の中のこのアラヤシキ

十月二十九日

「海蝶幻想」

蝶は行く青くはてなき秋の海

金銀の木犀散らす海の蝶

海超えて蝶は銀河の天空へ

コスモスの中で夢から醒める蝶

十月三十日

月は歌い人は露台を徘徊す

(快晴月齢十三)

十月三十一日

到来の柿のいわくもともに食う

満月を見上げていたら、今日宇宙は月を中心に、同心球状であることを知った。わたしの衰眼によれば、星星はその周縁を巡っているのだ。さてわたしはといえば、円い盆地の底にいたのであった。

十一月二日

秋寂ぶを『井戸の茶碗』を聴いて遣る

(志ん生)

名話芸破調を包むあわせ柿

十一月三日

露を飲む朝をまた得た「抜け雀」

十一月四日

阿蘇九重へ

すすき原光あふれて仏仰臥

十一月五日

すすき野を渡り姿を見せる風

錦秋が徐調休止で降りる谷

十一月八日

虎として一頭の猫茹田行く

十一月九日

雷神はまさに神足時雨降る

しぐれ降る夜には悟る床の無い下は奈落の舞台の上と

しばらくは舞ってみせよう床の無い舞台の上の人間の生

十一月十七日

木枯らしや胸の奥から咳をする

行く秋の虚空をつまみ掌に入れる

十一月十八日

枝折戸を直して冬の支度する

あごもたれ冬の訪れ待つ式部

「美は厳しさ、また、関係である」・・・サルトル

十一月二十日

冬を待つ山は朝日と霧の中薄墨色で揺るがずに在る

十一月二十三日

父の忌で一家の節目迎えた日母の病はまた改まる

十一月二十四日

雁浮かぶ入り江は風いで旅の途次

十一月二十九日

薬効は三省の時薬雨降る

十一月三十日

冬の陽は今落ちかかりクレーンの影は東の果てを極める

「錯乱」

甘い百合の香りがする冬のたそがれ
今は、この言葉が幻覚でない世界

世界で最強の国が爆弾の雨を降らせ
同じ空軍機が当の国に援助物資を投下して
それによって母子を殺す時代

「戦力はこれを保持しない」国の軍艦が
インド洋という周辺海域に出撃する時代
おお、グローバリゼーション
今は、言葉もむなしい冬の時代

百合の香りはその寒寒する世に
先駆けてか遅ればせかのすこしのなぐさめ

今は、そういう人の世

十二月二日

終にこの家の鬼は去りかねる

十二月五日

母打って歯を磨かせる冬の朝

十二月六日

千年の冬を耕す東坡の詩

夜冷えてみみずに代わり上げる声

十二月七日

田作りを食べて冬越す力得る

十二月十二日

雨だれが智慧の石筍積むを待つ

十二月十八日

小人に使役せられる師走かな

愚禿には朝に夕べにしむ寒さ

現し身は夢中に叫び上げる者

十二月十九日

屈惑を抱いて師走の日向ぼこ

柊を見る鬼の白石知恵も無し

十二月二十九日

寒椿落ちてめだかの失せた池

十二月三十一日

大つごもり光輪を負う月は今歳の境の子午線よぎる

二〇〇二年 正月
徐山亭 謹製



「月夜與客飲酒杏花下」

蘇 東坡

杏花簾に飛んで余春を散ず
明月戸に入り幽人を尋ぬ
衣を褰げて月に歩して花影を踏めば
炯として流水の青蘋を涵すが如し
花間置酒清香を発す
争でか長條を挽きて香雪を落さん、
山城の薄酒飲むに堪えざらん
君に勸む且く吸え盃中の月を
洞蕭声は絶ゆ月明の中
惟憂う月落ちて酒盃の空しからんことを
明朝地を巻いて春風悪しくんば
但見ん緑葉の残紅を棲ましむるを